

留学期間 2025 年 6月2日～6月27日

- 1、2 週目: 新光吳火獅記念醫院 Shin Kong Wo Ho-Su Memorial Hospital (SKH)
- 3、4 週目: 耕莘醫院 Cardinal Tien Hospital

このたび台湾輔仁カトリック大学(以下 FJU)との交換留学生として、台湾での臨床実習に参加し、FJU と提携する 4 つの民間病院のうち 2 つの施設で実習をさせていただきました。本報告では、各診療科での学習内容や、実習を通して学んだこと、印象に残った点をまとめます。

1 週目: Pediatrics 小児科

Pediatrics では、現地の医学部生 3 名とともに外来見学およびレクチャーに参加させていただきました。初日には、シニアレジデントの方がオリエンテーションを行ってくださり、現在入院中の患者についての説明に加え、病棟・施設内の案内をしていただきました。SKH の小児科では、入院患者の多くが感染症を主訴としており、その他にもけいれん発作、腹部疾患、泌尿器疾患などの症例を受け入れているとのことでした。白血病患者の受け入れ状況について伺ったところ、以前は白血病を専門とする小児科医が在籍していたため対応していたものの、現在はその医師が不在となったため、白血病患者は他の医療機関へ転送しているとの説明を受けました。

外来見学では、患者の入退室がほぼ同時に行われるほど診療のテンポが速く、その効率的な診療スタイルに非常に驚かされました。日本と台湾における小児疾患の違いについて質問したところ、日本で季節性とされる RS ウイルス感染症が台湾では年間を通じて見られると教えていただきました。

また、台湾の産後ケアについても興味深い話を伺いました。台湾では、出産後の約 60%の母親が 1 か月から 4～6 週間を産後ケア施設（坐月子センター）で過ごすことが一般的で、こうした施設では、授乳支援、栄養管理、休息の確保といった専門的な母子ケアが提供され、母親が心身ともに回復できるように支援されているそうです。さらに、台湾では外食文化が根付いており、家庭で自炊をする習慣が比較的少ないことから、授乳方法や離乳食の作り方がわからない母親も多いという話を聞き、文化の違いが育児にも影響していることを知ることができました。医療の背景にはその国の生活文化が密接に関わっていることを改めて実感し、今後、異なる背景を持つ患者と接する際には、こうした視点も大切にしたいと感じました。

2 週目: General Medicine

General Medicine では、チーム回診（査房）、教育問診、朝のカンファレンス、超音波レクチャーに参加させていただきました。

特に印象的だったのは、台湾では教育目的で行われる問診が「教育問診」として、通常の外来診察とは別に区別されて実施されている点でした。問診は別の専用エリアで行われ、そこには学生や研修医の問診に協力的な患者が来院します。まず、学生や研修医が問診・身体診察を行い、その様子を後方で医師が観察し、最後に医師自身が再度診察を行ってフィードバックを行うというスタイルが採られていました。日本の医学部では、実際の外来診療に学生が同席する形が一般的であるため、台湾の「教育問診」

という枠組みはとても興味深く、印象に残りました。

また、実習中には台湾の医療制度についても学ぶ機会がありました。台湾では、すべての国民および居住者に対して国民健康保険への加入が義務づけられており、「健保卡」と呼ばれる IC カード型の保険証を医療機関で読み込むことで、過去 6 か月分の診療記録や検査履歴を確認することができます。この仕組みにより、転院や他院受診の際も患者情報の共有がスムーズに行えるという点は、非常に合理的かつ効率的だと感じました。

さらに、台湾では診察にかかる費用は基本的に診察代のみが自己負担となり、検査費や薬剤費なども国民健康保険によりカバーされているそうです。一方で、政府から各診療所に対して保険給付の「年間予算枠」が設定されており、この上限を超えて診療を行った場合、ペナルティとして罰金が課せられる可能性があるという説明には驚きました。この制度は医療資源の過剰使用を防ぐ意図があると思われますが、一方で、医療の提供に影響を及ぼす可能性もあり、医療の質と持続可能性のバランスについて考えさせられました。

3 週目：Gynecology and Obstetrics 産婦人科

Gynecology and Obstetrics では、モーニングミーティング、外来見学、手術見学、夕方のカンファレンスに参加させていただきました。

手術見学では、経腔的子宮全摘術、帝王切開、腹腔鏡手術、ダヴィンチ手術、子宮内膜ポリープの切除、子宮頸部異形成に対する LEEP、羊水検査、子宮筋腫および付属器嚢腫摘出術など、幅広い症例を見学することができました。

中でも印象的だったのは、帝王切開後の新生児蘇生が、保育器内で行われていなかった点です。酸素飽和度の測定においては、まず四肢にセンサーを装着し、その後にポータブル機器の電源を入れて測定を開始しており、日本に比べて測定開始までにやや時間を要している印象を受けました。このときの新生児は SpO₂ が低値であったため NICU へと運ばれたのですが、その際も保育器ではなく、スタッフが新生児を抱えて直接運んでいたことに驚かされました。こうした一連の対応から、日本におけるより迅速かつ体系的な緊急時対応との違いを実感しました。

4 週目：Plastic Surgery 形成外科

Plastic Surgery では形成外科に加えて美容外科の外来見学、および手術見学をさせていただきました。今回指導してくださった李先生は形成外科および美容外科の両分野を専門としており、それぞれの領域における手術を見学することができました。実習で美容外科の分野を見学するとは予想していなかったため驚きもありましたが、日本では大学の臨床実習で美容外科を扱う機会はほとんどないため、とても興味深く面白く感じました。

実習中、日本では美容手術の多くが自由診療であり、主に専門の美容クリニックで行われていることをお伝えしたところ、台湾では多くの Hospital に美容部門が設けられており、形成外科に加えて皮膚科の医師も美容手術を担当することがあると教えていただきました。（台湾の医療機関は「Medical Center」「Regional Hospital」「District Hospital」「Clinic」の四層構造で構成されている。）

さらに、美容医療の提供形態について伺ったところ、台湾にも専門の美容クリニックは存在するものの、Hospital と Clinic の手術費用には大きな差はないとのことでした。Hospital では麻酔のモニタリン

グ体制がより充実しており、安全性の面で優れているとされていることから、比較的年齢層の高い患者は Hospital を、若年層の患者は Clinic を選ぶ傾向があるというお話を伺いました。

<実習や学生との交流を通して感じたこと>

今回、私は初めて、日本と同様に英語を母語としない国において、英語によるコミュニケーションを経験しました。その中で印象的だったのは、話者によって英語の発音やイントネーションに個人差があり、聞き取りやすさに違いがあるということでした。私自身、英語ネイティブとの会話でもすべてを正確に聞き取れるわけではないため、相手の発音の特徴を把握したうえで理解することは、より一層難しく感じました。一方で、ネイティブ以外と話者と英語で会話をする際には、各国特有の発音傾向や表現の癖を理解しようとする姿勢が重要であることを実感しました。

また、これまでの英語圏での経験と比較すると、使用される英語の語彙や表現が比較的わかりやすく、話すスピードも緩やかであったため、スムーズに理解できた場面が多くありました。英語圏では、ネイティブならではのスラングや話す速さに苦戦することも多かったため、今回の実習で感じたこうした違いは、新たな気づきとして印象に残りました。

全体を通して、台湾の学生や医療従事者の基本的な英語運用能力の高さには感銘を受けました。もちろん個人差はあるものの、英語でのコミュニケーションが全く取れないという人はおらず、学生同士の会話において言葉の壁を強く感じることはほとんどありませんでした。

私自身の英語力はまだ十分とは言えませんが、一度で伝わらなかった場合には別の表現に言い換えたり、お互いに内容を確認しながら会話を進めたりすることで、想像以上に深いコミュニケーションができたことは、大きな自信につながりました。当初は、言語の違いによって意思疎通に苦労するのではないかという不安もありましたが、実際には「言語が異なっても、互いの努力によって会話は十分に成り立つ」ということを強く実感しました。

今回の実習では、先生方や学生との会話は基本的に英語でしたが、ミーティングや患者さんとのやりとりでは中国語が使われる場面も多くありました。今回の留学に備えて事前に中国語の学習も進めていたため、患者さんとの距離感を把握する手助けとなり、学びを一層深めることができています。さらに、台湾の学生との交流を通じて、彼らの学習環境や医学部の入試制度、医学部カリキュラムや実習スケジュール、実習班の決め方、卒業後の進路など、さまざまな話題について意見交換をすることができました。私たちも日本の制度や学生生活について紹介することで、互いの共通点や相違点を発見でき、大変興味深く有意義な時間となりました。特に、眼科や皮膚科など人気の高い診療科では、成績に基づいた希望者同士の競争が必要となることなど、日本とは異なる制度が印象に残りました。

医療現場における英語の使用については、今の自分にはまだ十分な語彙力が備わっていないと痛感したため、今後は英語の医学教科書や論文などを積極的に読み、語彙力と表現力の向上に努め、もし再び留学の機会があれば、積極的に挑戦していきたいと考えています。

最後になりますが、今回の交換留学を実現するにあたり、ご支援くださった佐賀大学の先生方をはじめ、医学部同窓会・医学部後援会の皆様、そして受け入れ先である輔仁大学および各病院の先生方に、心より感謝申し上げます。大変貴重な経験をさせていただき、誠にありがとうございました。

台湾への臨床実習留学を経験した成果

20211093 安川誠

留学期間

2025 年 6 月 1 日～6 月 29 日

留学先病院

國泰総合醫院 (Cathay General Hospital: CGH)

期 間：2025 年 6 月 2 日（月）～6 月 13 日（金）

実習科：一般外科 (General Surgery)、急診科 (Emergency Medicine)

耕莘醫院 (Cardinal Tien Hospital: CTH)

期 間：2025 年 6 月 16 日（月）～6 月 27 日（金）

実習科：整形外科 (Plastic Surgery)、家醫科 (Family Medicine)

國泰総合醫院 (CGH) における実習

1 週目: 一般外科 (General Surgery)

台湾の医学生 3 名とともに一般外科で実習を行いました。CGH の外科手術は、消化管・肝胆膵にとどまらず、甲状腺や乳腺など幅広い領域に対応しており、大変勉強になりました。特に印象的だったのは、患者の希望と追加費用に応じて da Vinci によるロボット支援手術が選択可能である点です。これは日本の医療制度とは異なる、医療における選択肢の幅広さを示すものでした。また、手術時に使用するガウンやドレープは滅菌処理を施したうえで再利用されており、ディスポーザブル製品が主流である日本との資源活用の違いを認識しました。カルテ記載はすべて英語で行われ、医師のみならずコメディカルも学生段階から英語で教育されているため、病院全体の英語レベルが非常に高く、国際的な医療対応能力の高さを実感しました。

CGH はレジデント数が多く、著名人の受診も多いため、患者側の意向により学生が術野に参加する機会は日本に比べて限定的でした。

加えて、台湾の嗜好品である檳榔 (Betel nut) が口腔癌のリスク因子となるため、カルテの生活歴に「Betel nut chewing: no」といった項目が記載されている点からは、地域特有の疫学的背景が臨床現場に反映されている興味深い側面を学びました。

2 週目：急診科（救急科：Emergency Medicine）

現地医学生 3 名と共に救急科を実習しました。台湾では、症状の重軽度に関わらず医療機関の規模によって救急外来での診療費が変動するため、患者の救急外来へのアクセスが非常に良く、常に混雑している状況でした。観察室は満床で、廊下にもストレッチャーの患者が並ぶほどの逼迫した状況を目の当たりにしました。台湾では救急科が往診にも対応する点が特徴的であり、実際に往診に同行する貴重な経験を得ました。往診先では、椅子に物干し竿を括り付けて点滴スタンドの代用にするなど、在宅で病院に近い環境を工夫して再現する方法を学びました。台湾では看護師の人材不足が深刻であり、往診対象を拡大したいにもかかわらず、対応可能な看護師が不足しているという医療体制上の課題を耳にしました。また、不眠症治療薬であるデエビゴの効果が非常に高く評価されていましたが、台湾では保険適用外であるため、日本で保険診療として処方できる点が非常に羨ましがられていました。

文化的な興味深い点として、救急科ではマンゴーの持ち込みがタブーとされており、「マンゴー (mango)」の発音が「忙しい (忙：máng)」と同音であることから、忙しくなることを避けるという独自の習慣があることも印象的でした。

耕莘醫院 (CTH) における実習

3 週目：整形外科 (Plastic Surgery)

日本でいう「形成外科」を「整形外科 (Plastic Surgery)」と表記し、日本の「整形外科 (Orthopedic Surgery)」は「骨科」と表記されるため、初めにその表記の違いに戸惑い、文化的な違いを認識しました。

CTH では美容外科も手掛けており、今回の実習では主に美容系の手術や処置を見学しました。台湾は混合診療が可能であるため、手術や処方薬の内容によって患者の自己負担額が大きく異なる点が印象的でした。また、卒後すぐに美容医療に進むことが可能で、いわゆる「直美」が社会問題になっている点は、日本と共通する医師キャリアパスにおける課題であると感じました。

私自身、大学で形成外科の実習機会がなかったため、今回初めて見学した華麗な手術技術に非常に感動しました。今後の医学教育において、より多くの学生が形成外科に触れる機会が増えることを強く期待します。

4 週目：家醫科 (Family Medicine)

主に外来診療の見学を行いました。分院にも訪問する機会があり、キリスト教系病院ならではの聖堂見学や、院内牧師との対話の機会にも恵まれました。ICU などで院内牧師が患者と面談し、精神的なケアを提供していることを学びました。

家醫科では高血圧・糖尿病といった慢性疾患を中心に、服薬指導や生活指導などによって予防・管理に取り組んでいる様子を見学しました。また、同時並行で泌尿器科外来も見学する機会がありました。CTH は地域密着型の病院であるため、来院する疾患の多くは、男性では尿路結石、女性では尿路感染症が中心でしたが、数年来放置されていた若年男性の鼠径ヘルニアなど、興味深い症例も見学しました。

特に貴重な経験として、泌尿器エコーを実践的に行わせていただきました。撮像・計測・保存まで全て自分でやり、やり直しなしの緊張感ある実技訓練ができたことは、今後の臨床において非常に有益な経験となりました。

全体を通して

今回の留学を通じて、最も大きな学びとなったのは、多くの台湾の医学生と密に交流できたことです。彼らとの共同生活や実習を通して、国は違えど同じ医学生として抱える悩みや目標を共有することができ、大変有意義な時間となりました。台湾では、初期研修 (PGY : Post Graduate Year) 後の進路選択が自由ではなく、大学での成績や推薦状によって診療科が決まってしまう仕組みとなっており、将来を自分で選べないことに対する葛藤を抱えている学生も多くいました。

また、健康な若年男性には数か月間の兵役義務があり、その間は軍隊での訓練に従事しなければなりません。勉強や進路準備に集中したい時期に一時的にキャリアが中断されることへの戸惑いも聞かれ、日本のように自分の進路に専念できる環境がいかに恵まれているかを改めて実感しました。

CTH の実習中は、6 人部屋で現地学生 5 人と共同生活を送りました。彼らは皆、早朝や深夜まで自主的に勉強を続けており、その姿勢は大きな刺激となりました。医療制度の違いに触れることができたのはもちろんのこと、互いの国の文化や価値観、考え方を尊重し合いながら議論できたことは、机上では得られない貴重な経験でした。私は英語でのコミュニケーションに苦勞する場面も多くありましたが、それでも自分の言葉で伝えようとする姿勢の大切さ、そして相手に理解してもらう喜びを実感しました。この 1 か月間の経験を出発点として、今後さらに語学力と専門性を高め、将来的には臨床・研究の両面で海外にも挑戦していきたいと考えています。

最後になりますが、今回の交換留学を実現するにあたり、多大なるご尽力を賜りました佐賀大学医学部関係者の皆様をはじめ、受け入れ先である國泰総合医院、耕莘医院の先生方、スタッフの皆様に心より御礼申し上げます。また、両病院での実習や生活を円滑に進めるうえで多大なご支援をいただいた輔仁大学の先生方・職員の皆様、そして現地で交流を深めた学生の皆さんにも、心から感謝申し上げます。今回の経験は、私にとって今後の医師人生における大きな糧となるものであり、この学びを生かしてより一層努力してまいります。

台湾への臨床実習留学を経験した成果

佐賀大学医学部医学科 6 年 20211049 中村しおり

2025 年 6 月 2 日から 6 月 27 日までの 4 週間、台湾輔仁カトリック大学 (FJU) との交換留学生として佐賀大学の学生 4 人で台湾に渡航し、2 つの病院で実習を行いました。1, 2 週目は Shin Kong Wo Ho-Su Memorial Hospital(SKH)、3, 4 週目は Cardinal Tien Hospital(CTH)にて実習を行いました。

私の留学に対する目的は、①国外の医療施設の環境や制度、考え方について知り、比較して日本の医療について考えること、②現地の学生や医療スタッフとの交流を通し、日本国外の人との言語的・非言語的コミュニケーション能力を培うことの 2 点でした。この 2 点に沿って、実習内容、日本との違いの気づきの一部、交流を通して感じたことに分けて以下に報告します。

<実習内容>

○1 週目：小児科 in Shin Kong Wo Ho-Su Memorial Hospital(SKH)

英語でのレクチャーや学生の症例報告を聞いたり、外来見学をさせていただいたりしました。SKH の小児科には、気道や消化器、尿路、神経系の感染症の患者さんが多く入院しており、川崎病やけいれん、小児外科術前・術後の方もいらっしゃいました。私たちの実習を担当してくださった王先生はアレルギーがご専門で、外来では喘息やアトピー性皮膚炎、食物アレルギーの患者さんを多く診られていました。

○2 週目：総合内科 in Shin Kong Wo Ho-Su Memorial Hospital(SKH)

日々のチームミーティングや回診に参加し、研修医が外来を行う「教育外来」や心臓カテーテルを見学しました。私が参加したチームの Dr は循環器内科分野を専門とされており、肺高血圧症や徐脈頻脈症候群による失神、心不全による浮腫の管理目的などの症例の患者さんを担当されていました。高度の肺高血圧症の患者さんの Graham-Steell 雑音を聞かせていただきました。また、レジデント向けの腹部エコーのトレーニングに参加しました。

○3 週目：産婦人科 in Cardinal Tien Hospital(CTH)

毎日朝と夕方に行われるカンファレンスに参加し、オペやエコー外来の見学を行いました。オペは経腔的子宮全摘術や帝王切開、ロボット支援下子宮全摘術、子宮鏡下ポリープ切除、腹腔鏡下卵巣切除、子宮頸部円錐切除、子宮筋腫に対する PMWA（経皮マイクロ波アブレーション）などを見学しました。

○4 週目：家庭医学科 in Cardinal Tien Hospital(CTH)

外来の見学を主に行いました。健康診断の問診や結果説明を含め、プライマリケアを提供していました。本院とは離れたところにある分院での外来に同行し、施設見学をさせていただきました。また、先生が調整してくださり、小児科の外来も見学をさせていただきました。

<日本との違いとして興味深かったこと>

- ・ 成人入院患者の多くに外国人労働者が付き添い入院しており、簡易ベッドが備え付けられていることが印象的でした。小児科病棟にも付き添い入院の保護者のための簡易ベッドがあり、私は日本であまり見かけたことがなかったので、非常に良い設備だと感じました。
- ・ 家族への病状説明が電話で行われる場面をよく目にしました。家族が病院に足を運ぶ必要がなく、医療者・家族ともに時間を合わせやすい点にメリットがあると感じました。一方、日本では直接会っての説明が一般的ですが、資料や図を供覧でき理解や信頼が深まりやすいというメリットがあると思います。どちらのスタイルも一長一短があると考えました。

また、家族への説明を直接会って行う際も、わざわざ場所を設けることはせずにナースステーションのカルテを供覧しながらの形式をとっていました。カンファレンスルームを使うこともあるが、電話やナースステーションでの説明が多いとのことでした。

- ・ 手術で、手にはめる以外の用途で清潔手袋を利用していたところが印象に残りました。腹腔鏡下卵巣腫瘍摘出術で、5 cm以上のやや大きめの創部に清潔手袋の口を接続して気腹し、手袋の親指と薬指部分からポートを2本挿入していました。日本では、はじめは小さなポート用の創部を作り最終的に腫瘍等を体外に摘出する際に創を広げる術式を見たことがありました。しかし、あらかじめ大きめの創を開けて手袋を利用する方法は初めて目にし、とてもユニークで賢い方法だと思いました。
- ・ 台湾では出産後の母親は一か月程度、育児や家事をせず体を休める文化があることが印象に残りました。SKHの小児科の王先生によると、8割程度の母親は出産後に産後院（食事から育児まで世話をしてくれる施設）に一か月滞在するそうです。高級な施設では100万円ほどかかる場合もあります。「産後は体を休める必要がある」という根強い文化があり、産後院を利用しない場合でも姑が食事の用意や育児などすべての世話をするようなケースもあると聞きました。

出産は母体にとって精神・身体的に大きな負担がかかるイベントであり、産後のマタニティブルーや授乳のための睡眠不足はさらなる負担をかけることになります。韓国やフィンランドなど産後ケアが充実している国もある中、日本では各種の産後ケアの利用率が1割程度（令和4年度）と低く、費用や認知度の面で課題が残っていると感じました。産後ケアを充実させることは母体の鬱や虐待を未然に防ぐことにつながり、少子化が進む中で育児支援の一環として必要な観点だと思いました。

<現地の人たちとの交流を通して感じたこと>

初めて海外を訪れ、文化や言語の異なる人たちと交流しました。英語でのコミュニケーションを通して現地の学生と仲良くなれたことで、英語に自信がつけました。英語が堪能な学生や先生が多く、日本の英語教育の課題を感じました。渡航前に台湾の母国語である

中国語（台湾華語）を少し学んでいたもので、現地でたまに中国語を聞き取ったり伝えたりすることができ、嬉しかったです。また、日常のコミュニケーションを通して自身の中国語が成長していくことが嬉しかったです。

現地の学生と一緒にオペを見学した際には、治療方針や腹腔鏡モニターに映っている臓器、今どのような処置をしているのかといった疑問を、英語を使いながら議論することができました。伝えたい医学用語の英語が思い浮かばず、日本語しか出てこないということも多々あり、国外の人と連携して医療を行うにはもっと当たり前で医学英語を使いこなせる必要があると感じました。一方で、単語がわからなくても調べたり他の言葉を使ったりして補うことができ、完璧であることよりも伝えようとする粘り強さが大切だということがよくわかりました。

<最後に>

今回の留学を通して海外の医療について知り、日本の医療について改めて考える機会となりました。また、いろいろな人とのコミュニケーションを通して人としての成長も得られたように感じています。渡航前は現地の人たちとの交流に不安を持っていましたが、台湾の医学生たちや先生方は私たちをととても温かく受け入れてくださり、留学や国際交流はとても楽しいものだと感じることができました。日本に来る留学生を積極的に歓迎し、還元していきたいと常々思いました。また、今回の留学を通じてできたつながりを、これからも大切にしていきたいです。今後、さらなる海外留学のチャンスがあれば、積極的に参加していきたいです。

今回の交換留学のためにかかわってくださった佐賀大学スタッフの皆様や、台湾での実習をお世話してくださった先生方、医学部同窓会、医学部医学科後援会、医学部記念事業募金のご支援によりこのような貴重な経験をすることができました。大変充実した学びの機会を下さり、本当にありがとうございました。

台湾への臨床実習留学を経験した成果

20211004 吉田梨帆子

1) 留学・学習・国際理解への意欲に関して、参加前/後での変化

・医学の学習について

台湾の学生の学生姿勢を見て印象に残ったことは、台湾の学生は自主的に患者さんに関わり、問診をとり、わからない部分を調べていたということです。消化器外科を一週目に回った際に、台湾の学生3人と一緒に入院患者さんのところに毎日行きました。彼らは、三人で何人かの患者さんを担当しており、患者さんを訪れる前に、術後の合併症や術前に聞いておくべきことについて調べ、他に聞くことはないか話し合っていました。「どうしてそれを聞こうと思ったの？」などと聞き合っており、上級医に促されることなく、活発な議論をしているところが印象的でした。患者さんのところに行く時には聞くことのリストを毎回作っていました。グループの全員が意欲的に実習に取り組んでおり、その姿勢を自分も真似したいと思いました。一週目の金曜日に学生が術後の患者さんについてプレゼンし、部長の先生が一人の患者さんにつき5つほど質問するという会がありました。部長の質問に学生が次々と答えており、患者さんのことを深く理解していることが伝わってきました。また、この会は質疑応答を含めてすべて英語で行われており、自分はところどころ理解できていないところがあったので、現地の学生の英語力の高さを肌で感じました。このような機会は、患者さんを深く理解するモチベーションになるだけで無く、英語のプレゼンを行う上での良いトレーニングでもあると思いました。日本の病院実習でもこのような機会があれば、自分の英語力を試す機会になったり、友達から良い影響を受ける機会になったりするのではないかと思います。

・医学英語の学習について

私は、台湾に行く前に USMLE の STEP1 の受験を通して医学英語を学習しました。CBT 終了直後から留学の1週間前まで一年半にわたってほとんど毎日医学英語に触れ続けていましたが、台湾では話している内容や書いてある内容の理解は出来るものの、自分で表現する時に言葉に詰まることが多々ありました。言葉に詰まる場面は固有名詞を忘れている場合か、固有名詞の英語表記がわかっているもののその読み方がわからず上手く伝わらない場面が多かったです。台湾への留学に応募してから、留学を見据えて発音まで覚えるために YouTube を時々利用していましたが、もっと固有名詞の発音を気にしながら見ておけばよかったと思いました。

・英語力について

台湾での実習前は、英語力を伸ばすために何をすればいいのかよくわかりませんでした。実習を終えてコミュニケーション力を上げるためには正しい文法を身に付け、使える語彙を増やしていくしかないと感じました。台湾の学生で英語が流暢な学生がいましたが、教科書のように正しい文法とニュアンスの違う似た意味の言葉をたくさん使いこなしているからこそその理解しやすさなのだなと感じました。自分は大学3年生から英会話

教室に通っており、そこでは自分の知っている単語で言いたいことを伝える訓練をしてきましたが、語彙を増やすことができていなかったと感じました。これから、高校で習った構文を復習してそれらを意識して使うようにしたいと考えています。

・現地の言語の学習について

私は台湾に行くまで中国語に触れていませんでした。台湾についてから中国語の本を買って、出来るだけ習得しようと試みました。この経験から得たことは、いろいろなものを見るたびに「これはなんていうんだろう」と思いながら生活するとかなり語彙力がつくということです。結局中国語は話せるようにはなりませんでしたが、この方法で英語を学習していけば語彙は爆発的に増えるのではないかと思います、帰国後は英語だったらどう表現するのかを意識して生活しています。

・国際理解について

今回の留学の間、台湾の多くの先生や学生が留学生の私たちにとても親切にしてくださいました。毎日の学校が終わる度に誰かが「今日のこの後のプランはある？」と聞いてくれ、プランがない時は必ずおすすめの場所を教えてくれたり、連れて行ってくれたりしました。昼休みにスクーターに乗せてご飯に連れて行ってくれたり、先生が話している時にこっそり英訳してくれたり、ご飯を食べるときにみんなが一口ずつくれて結局自分が食べなかった分を食べてくれたりしました。留学を通して台湾がとても好きになりました。国際理解というと難しそうですが、その国のことを好きだなと思う気持ちが大事なのかなと思いました。日本も他の国の人たちにそう思ってもらえるように外国から来た人と接する時には親切にしてあげたいです。

2) 次の海外留学への関心を含めた内容

私は、脳神経外科を専攻したいと考えており、将来的には海外に臨床留学に行きたいと考えています。アメリカに行くかは分かりませんが、学習のマイルストーンとして、また、将来の選択肢を広げるためにも、7年以内に USMLE の SUTEP3 までを取り切りたいと考えています。これを軸として、正しい構文を使えるようになること、語彙を普段の生活から意識して増やしていくことを並行して頑張りたいと思います。STEP1 の勉強も自分なりに頑張ったつもりでしたが、自分で医学的な内容を説明するとなると稚拙な説明しか出てこ図、つめの甘さが露呈していたので、理解するだけで満足せず英語で説明できることを目標にこれから学んでいきたいと思います。

最後に、今回このような素晴らしい経験ができたのも、輔仁大学・佐賀大学の先生方、実習先の医療従事者の方々や学生さん、一緒に台湾に行った3人をはじめ、関わってくださったたくさんの方々のおかげであり、大変感謝しております。この留学で得た経験をこれからの医師としての生涯学習に生かし、少しでも社会に還元していけるよう精進してまいります。